

「梵天は神様を招く目印」 秋祭りに沸く羽黒山神社

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



橋に無事揚げられた梵天



今里宿内で様子あり梵天

栃木県内には、梵天を奉納する祭りが多い。那須烏山市月次の加茂神社、高根沢町桑窪の加茂神社、那須塩原市宇都野の嶽山等根神社、宇都宮市平出の雷電神社、同鶴田の羽黒山神社、同今里の羽黒山神社などが勇壮な梵天の奉納が行われる神社として知られる。中でも宇都宮市今里の羽黒山神社の秋祭りは、梵天祭りとその異名をとるほど奉納される梵天の数が多く、たくさん参詣者でにぎわい有名である。

ところでこの梵天とは、目立つという意味のホデに由来するといわれ、ボンテンともボンテンともいわれる。それがバラモン教の神であり、仏教の守護神ともなった梵天(梵語でブラフマ)の文字があてられたのは、音が似ていることや梵天が諸天の最高位に位置するという地位の高さにあやかったものとも考えられる。

今里の羽黒山神社をはじめ先の神社に奉納される梵天の形状は、孟

宗竹を二本、一本は根っこ付の根本側、もう一本は先の部分、これらを荒縄でしっかりと結んで繋ぎあわせ一本にし、竿の部分に、手綱を結びつけ、先端に大きな房をつけたものである。かつては麻や干瓢、烏山和紙、あるいはカンナで薄く削った檜など郷土の特産物を房として取り付けたものがあるが、近年はそうした物の入手が困難となりカラフルなビニール紐を用いている。

一本の長さは、十メートルほどにもなり、これを神社の神木に結び付ければ遠くからでも目立つ。つまり梵天は、本来祭りにあたって神様を招く目印であったのである。

今里の羽黒山神社は、海拔四五八メートルの羽黒山頂にあり、御神霊は、山形県の羽黒山神社より勧請したものである。江戸時代には宇都宮城主からも崇敬され、出羽三山信仰の高まりとともに、近郷近在の農民の間に五穀豊穡をもたらす作神とし

ての信仰が広まった。梵天の奉納は、元禄年間(二六八八―一七〇四)に氏家宿上組の若者が始めたといわれ、当初鬼怒川左岸の地域で盛んとなった。

現在でも、地元今里ばかりでなく鬼怒川を越えた遠く矢板市やさくら市などからも奉納される。梵天の担ぎ手は五十人前後、老若男女実に多彩。担ぎ手はそろいの半纏姿に白足袋をはき、梵天に結んだ縄を握りしめワッショイワッショイと掛け声をかけながら担ぐ。しばらく今里の宿内、名物の柚子売りなどが立ち並ぶ露店の間を採みみあいながら行きつ戻りし、頃合いを見計らって山頂の神社をめざす。参道は、頂上近くなると傾斜もきつくなるが、そこを年配の吹く笛の音に鼓舞されるように最後の気力を振り絞りながら担ぎ上げる。

山頂の神社に着くと、境内の人ごみの中で梵天をひと採みし、その後本殿のわきの櫓に縛り付け高く掲げる。昭和三十年代までは、近郷近在の団体から四十本近くの梵天が奉納されたという。最近は少なくなつたというが、それでも毎年二十本近くの梵天が奉納される。その後、福俵に入れて担いできたクシ餅を、参拝者めがけてまき、めでたく梵天が奉納されたことを祝う。

櫓に所狭しと掲げられた梵天。羽黒山の神様も迷うことなく降臨されるに違いない。